

「空母キラー」DF21Dについて

柴田 幹雄 陸自75

7月20日の読売新聞に、「中国が対艦弾道弾6発」の見出しで、DF（東風）21Dと推定されるミサイルを中国本土から発射する実験をしていたとの記事があった。

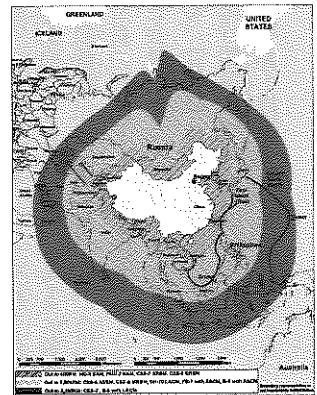
記事によれば、7月1日に中国南部の複数地点から発射され、南シナ海スプラトリー諸島北側の洋上に着弾したという。

DF21Dは、中距離弾道弾に区分されるDF21を航行中の艦船を攻撃する対艦弾道弾に改良したもので、射程は約1500kmと言われている。当然主目標は米海軍の航空母艦である。

2011年に、筆者はボストン郊外に滞在中、ハーバード大学傘下の研究機関が実施した、南シナ海で2030年時点において米中が衝突するシミュレーションに招待され参加した。スポンサーは米国防省であり、米国防省、国務省から現職中佐2名が参加していたほかは、大学教授、研究者などが総計20名ほどで、統裁部、日米側及び中国側に分かれてのこじんまりしたシミュレーションではあったが、2名の

中佐は大変優秀そうであったし、他の参加者には安全保障の本を執筆しているような有名教授も含まれていた。シナリオは、南沙諸島での小競り合いから米中の紛争になり、日本の艦船も中国軍により攻撃を受け、防衛出動を下令され自衛隊と米軍との共同作戦に至る。米海軍の空母も対艦弾道弾DF21Dで撃沈された。中国艦艇は南シナ海に集まり遊弋しているのだが、米海軍は中国本土から約2000kmの範囲内に長距離爆撃機、対艦弾道弾の脅威を理由に空母打撃群を2度と入れようとしなかった。中国軍の動きに呼応して他の複数国も軍事作戦を行うなど世界戦争発展の危惧もある中、米軍は、中国本土のOTHレーダーの攻撃なども行った。一方、米海軍は潜水艦を集中して南シナ海ほかで中国海軍の艦艇多数を撃沈した。ついに中国は海上補給路を断たれ、石油・ガス等入手困難になり孤立化する、というところで状況を終わった。

興味深かったのは、米海軍空母打撃群はDF21Dの脅威という理由で日本



周辺に一切近づかなかったという事だ。その判断は、当時の米国の安全保障にかかわる専門家が出したもので、米国内では妥当なものと評価されるだろう。そうであるならば、日本という地勢上の位置は米国の前方展開戦略における価値が変化したと理解せねばならないのではないかと、という疑問が湧いた。

米国防省は、2010年の「中国人民解放軍に関する議会報告」で、中国が台湾シナリオへの介入対応として行っていることを接近阻止・領域拒否（A2/A D）能力と定義づけ、その主要な手段の一つとしてDF21Dを挙げています。

A2/A Dの脅威はQDR2010で取り上げられ、併せてこれへの作戦概念としてエアシー・バトル（ASB）を打ち出した。ASBでは相手の攻撃を回避するため米軍の空母打撃群を含む前方展開戦力を圏外に退避さ

せ、その間にサイバー戦を含む各種手段で中国本土を攻撃し、情報・指揮システムを撃破する。その後日本列島付近まで進出するという作戦構想である。

その一方、ASBで中国本土をも攻撃対象にすることによるエスカレーションを回避するため、中国のA2/A Dの圏外でシーレーンを支配し、ニューヨークポイントを封鎖して経済成長に圧力を加え中国を締め上げようという米国版A2/A Dといえる作戦構想も生まれた。それがオフショア・コントロール（OSC）である。ハーバードでのシミュレーションの最終段階では中国海軍戦力を減殺し、経済的に孤立させて状況終了となった。OSCの効用も「検証」したような形である。

シミュレーションに参加した頃が丁度ASBやOSCなどが検討されている最中であつたと思われ、これらの作戦構想の有用性を検討する目的があつたかもしれない。

いずれにせよ、米国の対中国作戦構想に大きな影響を与えているのがDF21Dなのであり、米軍の前方展開戦略にも影響を与えかねない。シミュレーションに参加して以降、現職の海軍少将や、『ジャパン・アズ・ナンバーワン』で有名になったエズラ・ボージェル教授などに、DF21Dの出現で米海軍にとつて佐世保や横須賀の価値はどうな

